# 第三講　空所補充問題解法　35分

## 空所補充問題　LEVEL 10

次の文を読んで、あとの問いに答えよ。

ニュートンが集大成したようなテクノロジー科学はたんに思想上の成果として学者たちの規範になっただけではなかった。それは政治的・社会的にも支持を獲得することができた。というより、政治的・社会的に同様のエートスがすでに生成され定着しつつあったために、支持を得ることができたのである。

このことをもっと立ち入って論じてみよう。テクノロジー科学は十七世紀に登場した近代国家の中に受容された。何かを作れたりするという意味で有用であったから受容されたのだろうか？　必ずしもそうではない。そう見るのは、狭隘な［ a ］短見である。テクノロジー科学はいわば〝イデオロギー〟として近代的政体に取りこまれたのである。

近代政治哲学の伝統はイタリアのニッコロ・マキアヴェッリによって始められたと言われる。彼の政治哲学は、政治の［ I ］をほとんど問題

にしない。それは、与えられた状況下で君主がいかにして他の有力なライヴァルたちの詐術にかかって敗北することなく、人民にほどよく信頼され、すなわち恐れられすぎもせず、かといってあなどられもせず、統治できるかの技法について論ずる。『君主論』（一五三二年）は、君主の闘争手段として、法と力をあげているが、マキアヴェッリが主として考察の対象とするのは、力による統治である。彼によれば、君主は野獣性と人間性とを巧みに使い分け、ともかく勝利しなければならない。それゆえ、力の保持が重要である。「武装せる予言者は勝利し、武力なき予言者は破滅する」（第六章）のが政治の冷徹な法則である。このような政治技法は、マキアヴェッリを待たずとも、およそ政治が存在してからというもの現実に行われていたに違いない。［イ］けれども、彼は政治悪を現実に認容し、自分の名前で、一書をもって理論化をあえてした点で嚆矢をなすのである。

　マキアヴェッリは、一言で言えば、政治におけるリアリストであった。彼の思想を英国で最初に評価した政治家の一人、ベイコンはその著『学問の進歩』（一六〇五年）の中で書いている。「われわれはマキアヴェッリやその他の、人間はどんなことをするかを書いて、どんなことをすべきかは書かなかった人々に負うところが大きい」。マキアヴェッリは実際、人間の現実について書き、理想について書かない。古来、古代ギリシャの理想

主義（観念論）的哲学を創始したソクラテスも（したがって、彼の弟子プラトンもアリストテレスも）、キリスト教の教祖になったイエスも、人間がいかに生きるべきかを説いていた。マキアヴェッリは人間がどのように現実に生きているかを凝視した。甲認識関心のレヴェルを一段下げて政治に取り組んでいるのである。［ロ］

エルンスト・カッシーラー（『国家の神話』一九四六年）やレオ・シュトラウス（「政治哲学とは何か」一九五九年）は、マキアヴェッリの政治哲学とガリレオに始まる機械論的な近代自然哲学の［Ⅱ］を認めた。近代政治哲学も近代自然哲学も、ほとんどもっぱら「いかにして」（how）の問題——操作的・技術的問題——だけにかかわるからである。［ハ］

近代自然哲学は機械論的であると言われる。機械論的自然像とは自然を機械として見る考えをいう。説明することが困難な生命的、［b］なことがらを可能な限り排除しようとするのである。抽象的言葉づかいでは、「自然は微粒子の位置運動からなる」と言いかえられる。デカルトは、宇宙が微粒子の集成で、それらを統御しているのは数学的自然法則であると見る、機械論的宇宙像の最初の提唱者となった。数学と自然学における彼の最重要概念は「分析」であった。十七世紀には最も精緻な機械は機械時計であると考えられていたので、科学革命当時、自然は時計と類比的に見られた。

しかし、十七世紀に自然総体を「死んだ」機械と等値した思想家はいなかったはずである。デカルトですら、「分析」して到達して得られた自然は機械であるに違いないと考えたが、その逆の道をたどって、「総合」して得られる自然像が機械であるとまではあえて主張しなかった。人間の肉体はまだしも、精神を機械とは見なかったのが、その証である。自然は生きているに違いないが、とりあえず機械と見て、それにアプローチしようとするのが、テクノロジー科学の[c]合意なのである。そうアプローチする方が、自然を理解しやすいからである。換言すれば、[d]に操作することが可能になるのである。その点で、テクノロジー科学はマキアヴェッリの政治哲学に実によく似ている。[ニ]

　マキアヴェッリのリアリズムは、前述のようにベイコンによって高く評価され、さらにホッブズによって近代科学的よそおいをほどこされた。ホッブズは国家を[A]と見たのである。[ホ]伝統的主権者（王権）は[e]仮面をはがされ、国家をよりよく統治し、人民に安寧を提供しうるもののみが主権者に値するとされた。ホッブズにとって政治科学にアプローチする最も重要な概念は「分析」であった。彼によって、国家の成り立ちは個々人にまで分解（分析）され、こうした個々人の安全（最悪の事態としての突然の暴力死の回避）を保障してくれる政治システムはいかな

るものであるかが探究された。こういうアプローチの仕方から得られる帰結は、乙主権者は誰でもよい、したがって、政体は君主制でも共和制でもどちらでもよい、要は、人民に安定した生活を約束してくれれば、政治の最低の役割は果たされる、ということである。このリアリズムの観点に立った政治科学は、誰にでも評価されるはずであったが、現実認識があまりに冷徹すぎたために、ホッブズは彼の先駆者マキアヴェッリ同様みなから嫌われた。今日でもあまりに正直すぎる者が嫌われの的になるように——。

（佐々木力『科学論入門』）

問一　次の文は本文中に入るべきものである。［イ］～［ホ］からもっとも適当な箇所を選び、解答欄に記入せよ。

彼にとっては政治とは人民の統治の技術なのである。「いかにして」の技術なのである。

問二　文中の［a］～［e］に入るもっとも適当な語句を、次の中から選び、解答欄に記入せよ（同じ語句を二度用いてはならない）。

イ　政治的　　ロ　技術的　　ハ　実用主義的　　ニ　方法論的
ホ　神秘的　　へ　抽象的　　ト　有機的　　チ　近代科学的

問三　文中の［Ⅰ］［Ⅱ］に入るもっとも適当な語句を、それぞれ次の中から選び、解答欄に記入せよ。

Ⅰ　イ　手段や方法　　ロ　理想や現実　　ハ　目的や理想
　　ニ　方法や目的　　ホ　手段や現実

Ⅱ　イ　整合性　　ロ　対照性　　ハ　現実性
　　ニ　合理性　　ホ　類似性

問四　文中の［A］に入るもっとも適当な漢字二字の語句を本文中より抜き出して記せ。

問五　傍線部甲のような取り組み方をした結果、君主のあり方に何を見出すこととなったか。本文中のもっとも適当な五字以内の語句を抜き出して記せ。

問六　傍線部乙のような考え方が生まれた理由について、筆者が指摘しているもっとも適当な一文を抜き出し、最初と最後の五文字を記せ（句読点も一字に数える）。

問七　筆者の主張とあうものが、イ～ホの中に一つだけある。それを選び、解答欄に記入せよ。

イ　近代自然哲学は機械論的であるといわれるが、それはマキアヴェッリの近代政治哲学ほどには冷徹な現実と対決せず、人間を機械と見ているからである。

ロ　近代政治哲学は、技術的問題のみにかかわるものであり、近代自然哲学の機械論的な自然のとらえ方の影響下にあって、余り正直すぎる故に嫌われている。

ハ　近代自然哲学は、近代政治哲学が現実的に政治をとらえて分析するあり方の影響を受けて成り立ち、自然を冷徹に機械視し分析することをよしとする。

ニ　近代政治哲学は、近代自然哲学と対象認識の方法論の上でよく似ているが、その理想を喪失した現実重視のあり方は、共通した時代精神を反映している。

ホ　近代自然哲学は、たんに思想上の成果であるばかりではなく、現実にかかわる政治の上でも成果を生み、マキアヴェッリやホッブズの政治哲学を生む契機となっている。

問一

問二
a
b
c
d
e

問三
Ⅰ
Ⅱ

問四

問五

問六
〜

問七

# 第三講　模範解答

レベル10

問一　ニ

問二　a ハ　b ト　c ニ　d ロ　e ホ

問三　Ⅰ ハ　Ⅱ ホ

問四　機械

問五　力の保持

問六　彼によって～究された。

問七　ニ